

周辺からの記憶9

～2012年度 岩手（遠野・大船渡）～

村本邦子（立命館大学）

2015年11月20・21日、今度は台北で英語版「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。アジア災害後心理援助国際会議という催しで、漫画展の報告と福島の報告、ふたつの口頭発表も行った。



これまでやった漫画展のなかで、短期間のうちに一番たくさんの方が見てくれたのではないかと思います。インタビュー代わりのアンケートへの協力者も多かった。

京阪三条の「ココロかさねるプロジェクト」では、漫画の感想とともに「困難を乗り越えるコツ」について250人にインタビューをした。その結果を9月初めの仙台の質的心理学会、10月終わりの対人援助学会で、ポスター発表やワークショップの形で公開した。助成頂いたJR西日本に対する報告も兼ねているが、それにしても、このプロジェクト、想定をはるかに上回る面白い展開を見せてくれたものだ。本当はまだまだいろいろやれそうな気がするが、この半年、あまりに忙しくなりすぎたので、このあたりでちょっとブレーキをかけることにする。

震災プロジェクトも着実に5年目の実りを得ている。12月12日のシンポジウムには、現地の協力者をお招きして交流と知恵の交換をする。楽しみだ。

準備

現地の状況は厳しく、プロジェクトを共催で担ってくれる機関が見つからず、岩手の拠点を再検討する。立命館が協定を結んでいる大船渡市が候補地となるが、今回も共催してくれる機関が見つからず、広報の協力のみのお願いとなる。ハードもシフトも沿岸部はまだ大変な状況だ。

十年計画と伝えてあったため、遠野の方々に申し訳なく（それに遠野の魅力は筆舌に尽くしがたく）、今回は沿岸部で試行してみるが、合わせて遠野でも開催することができるということを伝え、去年お世話になった遠野市子育て総合支援センターの主任、立花正行さんが中心になって、社会福祉法人遠野市保育協会と一緒に子育て支援セミナーを企画してくださった。

大船渡の方は、大学の復興支援室とも相談し、カメラアホールという市の施設を借りて、漫画展と各種プログラムを実施することにした。今年は単独開催でも、次から共催してくれる相手が見つければいいがと願いながら。詳細まで詰められたのは結局十月も後半で、十分な広報期間もなく現地へ行くということになってしまった。不本意ではあるが、やむを得ない。

再び遠野へ

2012年10月31日、院生と一緒に、1日早くJALで花巻空港へ飛ぶ。今回、遠野の企画を作ってくださった立花さんが空港まで迎えに来てくれて、道中、遠野の様子を聞かせてもらう。現在、遠野の仮設住宅には35世帯が残っており、7世帯が子育て中。

阪神淡路大震災の時の反省を活かし、住民同士が交流できるような設計にしたためか、トラブルは聞かないという。そう言えば、遠野にある仮設住宅「希望の郷」は、住民同士が交流しやすいように各部屋の玄関前に屋根付きのウッドデッキを設ける工夫が施されているということで、昨年、通りすがりに見たことを思い出す。



15時、遠野市役所子育て総合支援センターへ立ち寄り、所長、課長、係長らにご挨拶をして、宿にチェックイン。昨年同様、遠野博物館前にある「あえりあ遠野」である。懐かしい。去年はちょうど文化の日で、遠野文化フォーラムをやっていた。少し早いですが、宿の人に教えてもらって、近くの小さなお店に軽い夕飯に行く。

宿がやっている18時からの「昔話の夕べ」

に出たくて急いでいたのだが、ギリギリになって慌てていると、わずか1分の距離と言うのに、店長自ら自分の車で宿まで送ってくれた。その1分の間に、実に濃厚な体験を聴かせてもらうことになった。店長は釜石出身で、子どもの頃からの友達が流されてまだ「あがらない」、去年の暮れには市役所に勤めていた友達がくも膜下出血で亡くなったそう。「この歳になるまであんなに泣いたことはありませんでした」と言う。もしかすると、偶然できた小さな枠組みの中で外部の人間にだけ話せることだったのかもしれない。外からは見えなくても、こんな思いを胸に秘めた人々がどれほどたくさんいるのだろうかと思う。

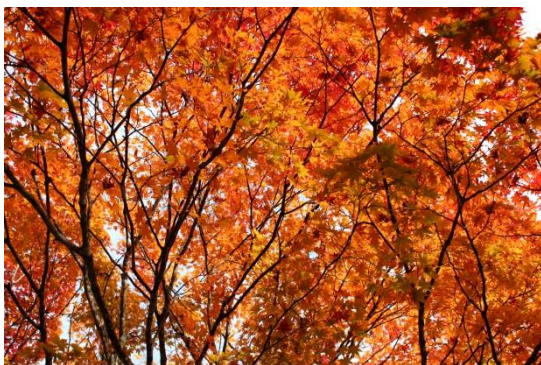
「あえりあ遠野」では、毎夕6時から30分、「昔話の夕べ」という語り部によるお話をやっている。3階の「語り部ホール」には囲炉裏があって、昨年、漫画展にも来てくださった奥寺恭子さんがお話しされていた。お客さんも多く、声をかけなかったが、ひょんなことからある方のおばさんであることがわかったという人だ。「むが〜し、あったずもな」と遠野物語を語り、「物語を語るときは、物語そのままを語ります。修飾を加えたり、意味づけをしたりはしません。物語の筋だけをそのまま語るようにします」と説明していた。遠野物語にはわかりやすいプロットがないのが特徴だ（<http://humanservices.jp/magazine/vol19/34.pdf>）。今やそんな文化に少しずつ馴染みつつある。



遠野のフィールドワーク

11月1日、朝から急に冷え込んで、霧がかかる。9時半にピックアップしてもらい、セミナー会場となる白岩児童館訪問して、園長と打ち合わせ。「今日からストーブを炊いています」とのこと。遠野には小学校が11校あり、小学校の数だけ児童館・児童クラブがある。白岩児童館は小学校併設で、両開きの扉で遠野北小学校と繋がっている。全国でも珍しく、1年生から6年生までを預かっており、16時半までは誰でも利用できる。生徒間に溝が出来にくいのだそう。最近の子どもの問題としては、虐待などより、転びそうになった時に手を着くという体のコーディネーションがなく、すぐ骨折する、子どもたちが疲れていて児童館に休みに来る、どこまでなら怪我をさせないかなど、けんかの加減がわからない・・・など、都会と同じ問題を抱えているようだ。他方、都会では少なくなった先生方の懐の深さを感じる。

院生は遠野が初めてだったこともあり、曲家、オシラ堂、カップパ掬を見て、美しく色づいた山上にある風力発電を見学する。土淵町の国有林内にあり、水芭蕉群生地入り口標識から1キロほどのところに、たくさん風車が並んでいた。霧の合間に太陽が顔を出すと、うっすら虹の橋がかかる。



午後は、遠野市役所子育て総合支援センターにある福祉課で、家庭相談員さん、婦人相談員さんから遠野の現状をお聴きする。家族のトラブルは相談に上がってこず、性的虐待はずっとゼロ、遠方に助けを求めて送り返されたケースもあるなど、コミュニティが生きているだけに、問題が表面化しにくいことをあらためて感じた。

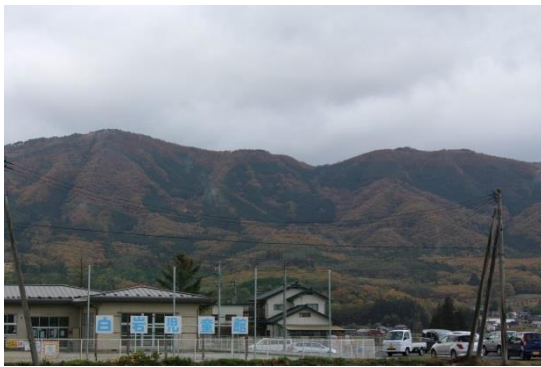
夜は、立花さんと遠野名物ジンギスカンを食べに行く。仕事への思いなど個人的なことも少し聞かせて頂き、立花さんがぐっと身近に感じられる。レストランでは、店の人もお客さんもほとんどが顔見知りのようで、暖かさと同時に難しさをもあらためて感じることになる。

遠野駅周辺もリニューアル工事も終わり、全国からやってくるボランティアの波も落ち着いて、遠野の人々の生活は少しずつ日常を取り戻しつつあるように見えた。



遠野から大船渡へ

11月2日、9時半にピックアップしてもらい、白岩児童館へ、10時から11時半まで「子育て支援者応援セミナー」。学童保育の指導員、保育士、家庭相談員、保健師など35名ほどが集まってくれる。要望に合わせて、子どもの発達課題やレジリエンスについて簡単に話した後、ネットワークを兼ねた交流の場とした。



終了後、道の駅「風の丘」で遠野ラーメンを食べ、リンゴを買って立花さんと別れる。遠野駅で友人の笠井綾さんと合流。今回、大船渡のプログラムと一緒にやってくれることになっているアメリカのアートセラピストだ。研究科が提携している California Institute of Integral Studies

(CIIS) との協働の一環でもある。笠井さんは、昨年も東北に来て、遠野のまごころネットでボランティアをしたが、今回、遠野のボランティアセンターに立ち寄ったところ、現在、瓦礫撤去ボランティアはほぼ終わり、生活困難に対する支援、以前から続けられている仮設での「お茶会」などを通してのコミュニティ作りなどに活動がシフトしていると聞いたそうだ。

長いトンネルをいくつも越えると、まったく別世界が広がっていた。大船渡は1メートル程も地盤沈下したとのこと、道路のかさ上げ工事中で、道路両脇に土嚢が並んでいたり、池のような水たまりがあちこちに残っていたりする。大船渡駅周辺は市街地だったそうだが、見渡す限りの空地になっていて、線路は途中で引きちぎられたように切れていた。大船渡の屋台村を見て、私たちの宿となる大船渡プラザホテルへ。ここも4階まで水が来たそうで、半分はまだ工事中。満潮なのかすぐ近くまで冠水している。





る。歪んで折れた鉄のポール、上からはぎ取られたようなコンクリート。よく見ると、海には花束が浮かんでいる。持っていかれたままになった方々に手向けられているのだろうか。



だんだんと日も暮れてきて、心細く物悲しい思いが胸に満ちてくるが、京都からやってきた仲間たちと合流して、少し賑やかになる。彼らは、気仙沼の市街地に打ち上げられた第十八共徳丸を見てきたらしい。それを残すか残さないかで遺族・被災者の間でも意見が分かれ、議論されているものだ（結局、残さないことが決まり、2013年10月に解体作業が終了している）。



大船渡でのプログラム

11月3日、朝早く目覚め、良いお天気で気持ちよいので、港周辺を散歩する。青く輝く海。大きな船や小さな船が並んでいて、一見、のどかで平和な光景だが、あちこちに津波の威力を感じさせる傷跡が残ってい





会場は、JR 盛駅の隣にあるカメラホールである。津波は盛駅まで来たそうだが、大船渡や気仙沼までは不通で、振替バスが出ていた。反対隣の三陸鉄道盛駅も不通となっているが、待合室がコミュニティスペースになっていて、小物やお弁当が置かれていた。カメラホールの入口には、「暖かい御支援に感謝します!」「心をつるい立たせて頑張ろう!」と手書きで書かれた二枚の紙が貼られている。「そうか、彼らは心を奮い立たせて頑張っているんだ」とあらためて思う。1年半。



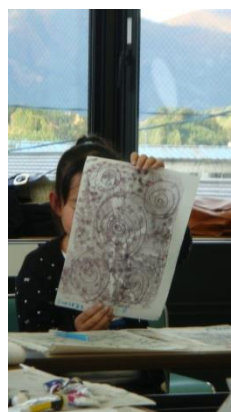
午前、支援者支援セミナー。仮設住宅での支援をされている方々が参加してくれたが、自己紹介時、お一人が、すざましい被災時の体験とその後の経過について話してくれた。ただただ驚きながら聞かせて頂いたが、後で振り返ると、大船渡の支援者たちの状況を紹介してくださったような気がする。大船渡市は、仮設住宅の支援を大阪

に本社にある人材派遣会社に委託し、地元で求人をかけて、37 か所の仮設を対象に100 名強の支援員を配置して、あらゆる支援をしてきたのだという。それまで支援の仕事をしてきた人々ではないので、なかなか難しい側面があったが、少しずつ信頼関係を築いてきた。「支援者たちも辛い状況なので、今日は立命館さんが来るということで、来てみた」とおっしゃっていた。立命館は大船渡と協定を結んでいることから、全体でひとつの組織として見られていることを実感した。一人一人は頻繁に来ることができなくても、組織から誰か彼かが入れ替り立ち代わりやってくれば、地元の人たちには、継続的な支援をしているという信頼につながることになる。

もうお一人は家が高台にあって被害はなかったとのことで、「被害比べ」も起こってしまうようだった。あちこちで起きている支援者たちの現状だろう。心を込めて支援しようとするほど圧倒される無力感についても語られた。

笠井綾さんに手伝ってもらって、最後の20分は体を動かすワークをすることに。まずは、①体のモニタリング（力を抜いて椅子に座っている感じ、足が床についている感じを感じながら、体の様子に気づいてみる）をしてシェアリング。次に、②一人ずつ「こんなふうにしたら体が気持ちいいな、こんなふうにしてみたいな」と思う動きをやってみて、皆でまねる（おなかを「の」の字でマッサージ、肩回し、腰回し、のびなど）。③動いた後は、体の変化を感じてみる。④名前と動き（名前を言いながら、体を動かす）⑤音と動き（音を出しながら、体を動かす）。空気が緩んで、皆の顔から笑

顔がこぼれるようにして終わることができた。まだまだ大変な状況だ。長丁場の支援が必要だろう。



並行して渡邊佳代さんによる遊びワークショップ「ふうせんで遊ぼう」、午後には笠井綾さんが「アートで遊ぼう」をやった。私は「アートで遊ぼう」に参加したが、ミ

ニハープの音色でリラックスしながら、タッチドローイングという表現アーツの手法を使った版画のようなものである。数秒で描けてしまうので、1 時間もするとたくさん絵ができる。これをペアになってシェアし、物語にした。私とペアになってくれた女の子は、「ハートの天使が降りてきて、ひまわりの芽が出て、新しいお友達と出会いました」というお話を作ってくれた。まるで自分が「新しいお友達」と言ってもらったような気がして、何だか嬉しくなった。そして、まるで子どものように、「また会えたらいいな〜」と思った。

前日の「漫画トーク」は、参加者 1 名に記者 2 名、関係者 2 名だったそうで、全体的に小さなプロジェクトだったが、大船渡の方々と良い出会いができたように思う。

ついでながら、お昼食べるものを買おうと近くのスーパーに行く途中、イタリアンがあったので入ってみると、ここがとてもおいしくて、そのまま夜の食事の予約をして皆でディナーを楽しんだ。後でわかったことだが、ボランティアたちの口コミで評判になっているポルコ・ロッソという店だった。店長の山崎純さんは地元の方で、津波は店の前まできたが、幸い浸水は免れたそう。

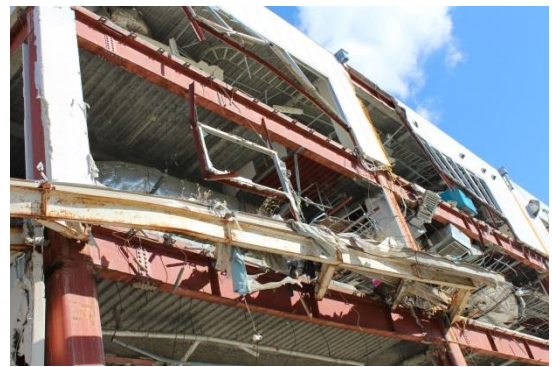


陸前高田から花巻空港へ

今日も良いお天気である。朝 9 時半にチェックアウトし、マイクロバスで陸前高田を經由して花巻空港へ向かう。



瓦礫が片づけられ、瓦礫の山に草花が生えて、まるで大きな丘のようにになっている。



5 階建てのマンションの 4 階までは窓が割れ筒抜けになっているが 5 階はそのまま残っているなど、そのまま津波の状況を物語る建造物が残っている。あちこちでボランティア団体と思われる人々が片付けや花を植えるボランティア活動をしていた。息長い活動を継続している人々の姿に、頭が下がると同時に、「私たちの市民社会もまんざら捨てたもんじゃないな」と心強く思った。



陸前高田を通ると、高田第一中学校仮設グラウンドに「陸前高田市産業まつり」の旗がひらめき、賑わっていた。震災後、2年ぶりの開催だということで、何だか人々の顔も心持ち輝いているように見えた。「まあ、元気だったのね!」と喜び合い、知り合いの安否情報を交換する会話も耳に入ってきた。被災後、避難してバラバラになってしまい、消息もわからなかったのだろう。

小さなブースでは、農産物や海鮮などの特産物や復興を象徴するようなグッズも売っていた。珍しい物としては、食べるほおづき。陸前高田で作っているという。甘酸っぱいフルーツのような感じだった。その他、「ぶどうサイダー」やりんご、「奇跡の一本松」の絵葉書など売っていた。復興への一步を象徴する産業まつりだったと思うが、被災して出店できなかった方々もあったに違いない。

駐車場につながる地面は、地盤沈下のためところどころぬかるんでおり、靴底はドロドロになってしまった。

岩手の風景には、あちらにもこちらにも哀しみ、悼みと希望が散りばめられているように見えた。震災から1年半、影があつて光があるという光景をそのままに胸に刻みたいと思った。来年も同じ場所でご縁ができることを願いながら。

つづく

